

正史を訪れる

プロローグ

森隆一

韓在帶方之南 東西以海爲限 南與倭接有

韓は帶方郡の南にあり、東西は海である、南は倭と接する。

倭人在帶方東南大海之中

倭人は帶方郡の東南の大海の中にいる。

プロローグ

表紙に掲げたのは、三国志・魏書・烏丸鮮卑東夷傳のうち韓条の冒頭と、『魏志倭人伝』といわれている倭人条の冒頭の文であり、この二つの文の違いを調べてみようとしたのが、『正史を彷徨う』を執筆するきっかけとなった。違いは2つある。1つは位置の違いであり、もう1つは、倭と倭人である。

倭人条に書かれている女王国への行程は邪馬壹国(邪馬臺国)の位置の推定において、出発点となる資料である。実際、これを基に、邪馬壹国の位置を推定した著作が数多く刊行されている。この他には、後漢書・東夷列傳・倭条に邪馬臺國が、梁書・諸夷・倭条に邪馬臺國が書かれていて、倭王の居住する所とされている。

本稿では、倭条を主にして、東夷伝を読み考察していくことを目標とするが、縄文・弥生を大雑把に眺めることから、始める。これは、前稿『正史を彷徨う』では、縄文海進を考慮すれば、かなりの疑問の解消させ得ると思われることによる。これについては、何が出てくるのか楽しみである。

東夷伝の各国条は、地勢・風俗・国勢(出自・歴史・政治体制)などの概略のあと、記年記事が書かれている。記年記事の多くは朝貢とこれに対する処置と思われ、遼東郡・楽浪郡(・帯方郡)の報告に基づくものと考えられる。高句麗では、侵略と征討の記事も多い。その他の東夷の国では、風俗や征討の記事は難しい文が多い。地勢・出自と記年記事の簡単なものを主な対象とし、それ以外の記事は飛ばしてきたが、風俗の記事などはもう少し読み取る努力をして、取り挙げていきたい。

(中国の)正史は次の王朝が前の王朝の歴史を書くことが慣例とされているが、後の時代に作成された王朝も幾つかあった。南北朝時代の正史の多くは唐代に編纂された。中国の王朝は周を除き概ね 300 年程度以内で滅びている。前王朝の悪政により滅亡に至ったこととそれを滅ぼした自己の正当性を主張するために書かれたと読んだことがある。これは本当であろうが、書かれたことは、特に記年記事は、事実考えている。滅亡するには悪政があった場合が多く、膨大なデータの全ての記録を収録することは不可能であるから、都合の良い記事を抜き出せばよいと思われる。記事の選択は作者の意向による。

高句麗・百濟・新羅を扱った三国史記、高麗史は上の意味での正史といえる。高麗史は本稿の対象とする年代以降意向を扱っている。一方、日本ではこの意味の正史は有り得ない。万世一系の天皇が統治していることより、次の王朝が有り得ないからである。出来るのは〇〇天皇紀の類いであり、実際、日本書紀・続日本紀・日本後紀・続日本後紀・日本文徳天皇実録・日本三代實録が編纂されている。これらは六国史と呼ばれていて、光孝天皇 884-887 までをカバーしている。この後は、正史とみなし得るものは編纂されていない。

国史が途絶えたのは、律令体制の崩壊と関係するのかもしれない。あるいは、中国語(漢文)の能力の低下ではないかということも考えられる。日本書紀の完成は 720 年で、最後の日本三代実録は 901 年に完成。一方、土佐日記の成立は承平 5 年 (934 年) 頃といわれる。

ここでは、この六国史を日本での正史と呼ぶことにする。古事記は日本書紀を補うものとして国史に準ずるものと考えるが、現状では十分に理解することができていない。

また、中国の正史を単に正史と言い、他は、三国史記、六国史は書名の日本書紀・続日本紀・・・と呼ぶことにする。

唐までの中国の正史は 1 史記、2 漢書、3 後漢書、4 三国志、5 晋書、6 宋書、7 南齊書、8 梁書、9 陳書、10 魏書、11 北齊書、12 周書、13 隋書、14 南史、15 北史、16 旧唐書、17 新唐書である。

これらの東夷伝のうちで最も知られているのが三国志魏書のものであり、この倭人条は魏志倭人伝とも呼ばれてもいる。漢書には東夷伝はなく、代わりに、卷九十五 西南夷兩粵朝鮮伝が書かれている。史記も同様に、卷一百一十五朝鮮列伝である。朝鮮に関して書かれている内容は、共に、武帝の衛氏朝鮮征討の話である。この後、明史の李氏朝鮮まで朝鮮は登場しない。陳書と北齊書には外夷を扱った列伝がない。

漢書武帝紀では

“元朔元年 BC128 東夷の葦君の南閭が二十八万人を率いて投降してきた。そこを蒼海郡とした。” 東夷葦君南閭等口二十八萬人降 為蒼海郡

“三年 BC126 蒼海郡を廃棄した。” 罷蒼海郡
と書かれている。

これが正史における東夷に関する最初の(記年)記事と思われる。

この次の記事は、

“元封二年 BC108 朝鮮王は遼東郡の都尉を攻殺した。朝鮮王を死罪とし朝鮮を撃つことを天下に募った。” 朝鮮王攻殺遼東都尉 乃募天下死罪擊朝鮮

“三年 BC108 朝鮮がその王右渠を斬殺し投降してきた。その地を樂浪・臨屯・玄菟・真番郡とした。”

朝鮮斬其王右渠降 以其地為樂浪 臨屯 玄菟 真番郡

である。

これが漢四郡あるいは朝鮮四郡と呼ばれるものである。臨屯郡と真番郡は BC82 年に廃止され、樂浪郡は 313 年に玄菟郡は 404 年に高句麗により滅ぼされた。

この経緯から、武帝の時代に東夷が認識され、遼東以東を単に朝鮮と呼び、蒼海郡をまず設置した。衛氏朝鮮を征討した後四郡を置いたが、樂浪郡以南は領有する価値が無いと判断され、廃郡されたのではないかと考える。武帝の頃は遼東郡より奥地を朝鮮と呼んだのではないかと考える。この範囲は、凡そ、現在の北朝鮮と韓国と満州東南部からなる。

倭が正史に登場するのは後漢書以降、旧・新唐書までで、後者では、倭と日本が共に取り上げられている。

後漢書の倭条の最初の文は

“倭は韓の東南の大海の中にある”

倭在韓東南大海

で後漢書で取り上げられている東夷の国は、倭の他には、高句驪・東沃沮・北沃沮・濊・韓である。

後漢書で韓条の始めは

“韓には馬韓・辰韓・弁辰がある。馬韓は西に在り、54カ国からなる。北では楽浪郡と接し、南では倭と接する。辰韓は東に在り、北は濊貊と接する。弁辰は辰韓の南にあり、また12カ国からなる。南では倭と接する。”

韓有三種 一曰馬韓 二曰辰韓 三曰弁辰 馬韓在西有五十四國 其北與樂浪 南與倭接 辰韓在東 十有二國 其北與濊貊接 弁辰在辰韓之南 亦十有二國 其南亦與倭接 であり、馬韓と弁辰は南で倭と接すると書かれている。

三国志の冒頭は表紙に書き出した

“倭人は帯方郡の東南の大海の中にいる。” 倭人在帶方東南大海之中で始まる。倭人以外には、夫餘・高句麗・挹婁・濊・韓などが取り上げられている。

“韓は帯方郡の南にあり、東西は海である、南は倭と接する。”

韓在帶方之南 東西以海爲限 南與倭接

と書かれている。

この記事の不整合がもう少し正史を眺め考えていくきっかけとなった。このためには、テキストをどうするのがまず問題となる。

簡単に入手できるものとしては「倭国伝」（藤堂・竹田・影山 訳、講談社学術文庫）が挙げられるが、東夷伝の全てが取り挙げられてはいない。さらに、全ての正史の訳は有るか無いかもわからなかった。さらに、考えてみれば、テキストの入力が大変である。

ここで、Web surf しているうちに Wikipedia の中国版である「[維基文庫](#)」にいきついた。維基文庫は漢字文献のデジタル図書館ともいえるもので史書・典籍から小説・経典まで網羅されている。本稿では、この

維基文庫→史書→「[正史](#)」から引用する。

底本については、書かれているものと書かれていないものがある。恐らく、上海古籍出版社から出版された「続修四庫全書」ではないかと思っている。一部のテキストは簡体字で書かれているため、諦めかけたが、どんと来い中国語→「[中国語の簡体字と繁体字を相互に変換](#)」を見つけた。これを利用して、繁体字に変換した。

このサイトでは「ピンイン変換」を行うことも可能である。

東夷伝を眺めていると、多くの疑問が浮かんでくる。当面は、疑問やこれに対する感想的考察を挙げていくことになる。ここで、手掛かりがありそうな疑問と、解決したい疑問を選び、大きなものは番号を付して

いくことにする。まずは、本稿のモチベーションともなった倭の位置に関する疑問を1番とする。

疑問 0.1. 韓条では南では倭と接すると書かれているのに、倭(人)条では、倭は東南大海中にあると書かれているのは何故か。

本稿の基本的な方針として、正史の記事は史実とする。倭の位置に関する韓条と倭条のように、記事が矛盾する場合には検討をし、一定の解釈おこなう。これらから、作業仮説を設定し考察の基本とするが、作業仮説の検討も、必要ならば、行っていく。

三国史記と日本書紀の記事に関しては、まず、正史の記事と対応する記事をさがす。対応がついた記事をA級の記事とする。次に、三国史記の各国の記事の間で対応する記事を見つける。これらの記事をB級の記事とする。これらの記事から作業仮説を設定する。大雑把な規準として、各国の王のうち、正史にその名が登場した王以降の記事はほぼ合っていると考えている。今のところ、高句麗は第6代太祖大王宮 53-146、百済は第14代近肖古王 346-375、新羅は第23代法興王 514-540と考えている。倭(日本)については、天皇が王とするとき若干の疑問は残るが、ほぼ確実なのは、推古天皇(聖徳太子)と考えている。

続いて、作業仮説間の記事の検討を行っていく。現在はこの段階で彷徨っていると思っている。

上記各書の記事に対する信憑度は

高句麗本記 > 百濟本記 > 新羅本記 ≒ 日本書紀

と想定している。

始めは「倭国伝」のものを訳として用いた。これは(倭国伝)と示した。しばらくすると、タイプに時間がかかることと、引用する部分の訳を全て手に入れることはほぼ不可能であるとわかった。さらに、倭国伝の訳は丁寧なものではあるが、正史の訳としてはどうかと思われるところもみられた。

ここで、“漢文は古代中国語で、中国語は漢字が英語風に並んでいるものである”との観点から、自分で試みることにした。簡単な文については、利用上は倭国伝の訳と大差なかった。また、訳せないものの多くは、それが無くても、本稿のレベルでは殆ど問題にならないように思えた。さらに、このほうが訳をタイプするより遥かに楽しい。この意により、筆者の訳は、訳というよりは、理解した内容と考えて頂きたい。

Wiki「漢文訓読」

漢文訓読とは、文語体中国語の文章である漢文を文体をそのままとして、符号(返り点)・送り仮名などを付けることによって日本語の語順で読解できるようにすること。古くは乎古止点によって、漢文に「を」や「こと」などを補うのに興り、返り点で読む順番を示したり、送り仮名や句読点、片仮名などで日本語の訓で読む助けにしたりして発展した。ヲコト点・返り点・送り仮名・振り仮名などを総称して訓点という。

漢文訓読の形にして読解したものを漢文訓読語あるいは単に訓読語と呼ぶ。漢文訓読自体は漢文が中国大陸から入るようになった古代の段階で既に存在したと考えられているが、その語形が表記されるようになったのは、9世紀頃とされている。漢文訓読語では、文章そのものには触れず、読解時に日本語の文法に合わせて上下を転倒して適切な助詞・助動詞・活用語尾などを補い、それ以外のものは漢語として読んでいく方法が取られる。そのため、訓読自体も漢語の影響を受けやすく翻訳口調になることもある。一方で、その歴史の長さから古い日本語の形態を現代に伝える読み方や反対に仮名文字の発生以後行われなくなったものや類似の意味の日本語に置き換えられたものもある。

本稿の訳に関して、注意を述べておく。

- 倭王が使いを送ることは、正史では 奉貢朝賀、朝獻、遣使、上獻、入貢などが用いられているが、本稿ではこれらの差は影響しないと思われるので、一括して朝貢とした。
- 多くの記年記事には月まで記されているが、本稿では殆ど月の差は影響しないので、一部を除いて、月を省略した。日本書紀では日も干支で書かれているが、これは数字に換算できないので省略した。
- 正史の引用文では維基文庫の書体をそのまま用いたが、その他では新体字を用いるようにした。
- 引用した記事のうち、難しい個所と殆ど用いないと思われる箇所は訳を放棄し、・・・で表した。

他には

- 筆者が作成した(引用のない)地図は「[CraftMAP](#)」の白地図を基に作成した。
- 正史の引用文で ○/△ となっている箇所は簡体字から繁体字への変換の候補で選べなかったものである。

‘正史を彷徨う’で頻繁に参照した web site を挙げておく。

- 「[元号一覧 \(中国\)](#)」：正史の記事の記年の西暦はここから求めた。

□ 空企画「[歴代天皇・皇居等一覧](#)」：天皇の在位期間を「空企画」で参照することが主である。これは、確実な天皇の在位期間から、日本書紀の天皇の在位年数を基に、在位期間を逆算したものとみられる。

このサイトは現在(2021年11月)見つけられない。近い情報が得られるサイトは「[歴代天皇一覧表](#)」が候補である。

- 日本語 Wikipedia。これは Wiki「項目」で示した。
- 「[ウィクショナリ](#)」
- 「[コトバンク](#)」

‘石仏あれこれ’ B2 仏教の成立からは、大陸では標高 20m 前後、‘正史を彷徨う’ エピローグから、日本では標高 10m 辺りが古代人にとっての居住最低標高ではなかったかと考えている。

この検証のため、適切は地理院地図を自分で作る色別標高図を作成し、Flood Maps に置き換えることを先ず行うことにする。

歴史の本を読みだしたのは

相沢忠洋「岩宿の発見 幻の旧石器を求めて」1969 講談社

宮崎康平「まぼろしの邪馬台国」1970 講談社

が始めと思っている。これは‘歴史ブーム’というものの走りと思っている。この後、講談社は同じ想定で古代史を主とした本を幾つか出版している。

松本清張「古代史疑」1968 中央公論社

はこの後に読んだ。

江上波夫「騎馬民族国家」1967 中公新書

は読んだと思うが、記憶が薄い。

Wikipedia「江上波夫」では

1948年、東京・お茶の水駅近くの喫茶店に江上と岡正雄、八幡一郎、石田英一郎の学究仲間3氏が集った座談会で披露され、「日本民族=文化の源流と日本国家の形成」という特集記事で発表された。かかわりの深かった研究誌『民族学研究』の出版元が経済的に困っているので売れる論文を書いて助けよう、と座談会が企画されたという。

と書かれている。この座談会の記事を単行本で読んだと記憶している。

これは、日本民族の源流 講談社学術文庫1162と同じ内容の可能性が高い。